

# 乳幼児の人格形成(一)

中沢 たえ子

わたくしは、今回、人間の人格を形成している一部分、しかも最も重要な部分である自我の問題について、つぎの四つの項目に分けて述べたいと思う。そして子どもとかわりあう日常生活の場面で、わたくしたちが幼児の自我に深い洞察を加えることによって、幼児全体をいかによりよく理解できるかを、読者の方々と一緒に考えたい。

- 一、自我の分離・独立
- 二、自我と攻撃性
- 三、自我と空想
- 四、自我と嫉

言うまでもなくわたくしがここでのべる自我とは、精神分析学的理論に立脚している。フロイドは人間の精神構造を、イドE・自我ego・上位自我superegoの三層に分け、それに加える幾つかの説をもって、神経症の解明や治療に役立てようとした。精神分析学、とくに自我の問題が、子どもの分野で本当に開花したの

は、フロイドの娘、アンナ・フロイド及びその仲間たちによるもので、乳幼児の心理的障害の予防、治療、また正常小児の人格発達の研究分野などで多くの業績を示し、児童相談やその親のガイダンスに非常に役立っている。ちなみに、精神分析的に用いられる自我とは、どのようなものであるか一応Heinz Hartmannの言葉を借りてのべよう。“自我とは、その機能によって区別されるべき人格中の一つの構成部分で、その重要な機能は、個人が現実と関係する部分の中心に座している。……自我機能とは、人間が現実接触に際して使うもので、そのためには生来与えられた運動的、知覚的機能、更には環境から得たさまざまな機能が与えられる。同時に自我は内外から加えられる刺激にむかって防御する働きを持っている”(自我の防御機能として異常心理学などで一般によくとりあげられる部分である)

## 一、自我の分離・独立

近年わが国では「三歳児健診」と称して、各地域の保健所を会場として満三歳になった幼児の身体的、精神的発達を検診することになってゐる。わたくしは、その集団検診に医師として参加しながらあることに気づいた。まだ三歳といえは大半の幼児たちが集団生活の経験がないため、大勢の母子が集まった会場の中で、それぞれが緊張と不安の面持である。不安は主役の子どもだけでなく、付添いの母親たちも同様に、あるいはわが子以上に感じているようで、その母親たちが子どもに言いよせている言葉が、わたくしの耳に入ってくる。「これをしないと幼稚園へ行かれないのよ」「幼稚園へ行くんだから泣かないのよ」……。実際には、三歳児健診と幼稚園入園とは何の関係もないのだが、沢山の母親が会場で、無意識に口から出す言葉が、「幼稚園へ行く」ということであるのは非常に興味深い。緊張した心の中から、ついわが子に「幼稚園へ行くのだから……」と言いきかせる母親の心理をわたくしは考えてみた。それは、出生以来、これまで物理的にも心理的にも母親から一人で離れたことのない我が子が、いよいよ家外で、母親以外の他人との関係を持つ時期が来た、つまりは自分の単なる分身ではなくなってきた、ということ、母親たちは漠然とながらも感じ、それが「幼稚園へ行く」という言葉で表現されるのではなからうか。

昔、このようにわが子の独立の第一歩を感じる母親の意識は、子どもの小学校入学の頃ではなかったらうか。しかし、戦後、しだいに幼児教育が充実するにしたがい、幼稚園入園の時期となり、更には三歳児健診の、いや、最近はずっと幼い時期までに早まって来つつある。このような早期移行現象は、社会心理学と個人心理学の接点の分野で、それなりにわれわれに多くのことを考えさせる。しかしこの問題は他の機会に譲り、今回の主題、母親がわが子の心の独立の時期到来を感じるとき、幼児本人の心の独立、つまりは、幼児の人格の中で、自分自身で現実と接触するために使う自我の独立は、どのようにして起こり、成長しているのであろうか、またそれが健全に成長しないとき、どのような問題として認められるのか、について考えたい。

普通、生後一、二か月頃の赤ん坊は、眠り、飲み、排泄し、というように、ただ生理的現象に支配された一日を過ごしている。赤ん坊は乳を与えられ、乾いたおむつを当てられ、満足すれば安らかに眠るが、空腹や、濡れたおむつや、あるいは何かの生理的不快感、例えば腸内のガスや、体の病氣などがあれば、泣いて母親の注意を引く。こんな時、母親は、可能な限り赤ん坊の不快感を取り除くために心を配る。優しい声、柔らかい母親の肌、温かい

乳などが赤ん坊の心を鎮め、自己愛的な平和な眠りにさせよう。こんな一見何げない母子間の繰り返しを、ハートマン Hartmann は「溺愛と剝脱の原則 Deprivation and Indulgence principle」と名付けた。彼によれば、乳児が不快や空腹で泣くとき乳脳を体験し、母親の世話で満足するとき溺愛を体験する。この原則を一日のうちに何度となく繰り返し体験しながら、乳児は自身自身の体内にしたいに育ってくる視覚、聴覚、その他の感覚機能、更には記憶力などを使って、不快に泣きながら母親の到来を空想し、空想通りに現われる現実の母親を外界に存在する特定の対象として認識し、更には愛するようになる。つまり、乳児が外界、その代表者である母親を認識するためには、「溺愛と剝脱の原則」が必要条件であり、溺愛か剝脱かの何れかにあまり強く偏りすぎたとき、正しい母親認識、即ち健康な、愛情をもった母子関係の基礎に問題が起こり易い。以上がハートマンの説であるが、彼はこのように述べながら、更に人格の中核、あるいは基礎とも言うべき自己認識（自己と外界の区別の認識）が、乳児初期からの母子関係に重大に基礎を置いていることを示唆している。

「溺愛と剝脱の原則」を通して育つ母子関係は、乳児の笑顔の成長を見てもよくわかる。生後一、二か月の乳児は、とくに何を見てということもなく笑うことがある。昔の人は「仏様が笑

わせている」と言ったそうだが、そのうちにたしかに人間だけを  
見て笑うようになる。三、四か月頃の乳児である。余談になる  
が、小児科医としてこれから予防注射をしようと針を持っている  
私に、この月齢の赤ん坊は笑いかけて来る。私は思わず「ごめん  
なさい」と一言いってしまう。これが九か月頃の乳児になるとも  
うそうはいかない。早い乳児で六か月頃から、遅くとも十か月頃  
までの間に、乳児は養育に当たってくれる母親、及び日常顔を会  
わせる家人と他人とを確実に区別しはじめる。見なれない人には  
もう笑顔は見せず、まじまじとその人の顔を見、近寄られると、  
泣き顔になって母親の腕に顔を隠す。こうなると、機嫌の悪い  
時、病気の時などは、母親以外に乳児を慰めることはできない。  
人見知りする頃の乳児は母親が要求充足と満足をもたらす外界の  
特定のものであることを認識し、ひたすら母親に依存する。また  
母親もわが子のそのような心を感じ、子どもと心理的に一体とな  
ってその心は何時とも子どもの方を向いている。このような状態を  
マーガレット・マラー Margarette Malar は「共生的関係」と  
表現し、「この時代にまだ現実対処のしかたを知らない、非常に  
未成熟な自我しか具わっていない子どもは、母親の成熟した自我  
を借りて現実に対面している」と説明している。

安定した心の母親に育てられた乳児は、母親に依存し、愛する

ことを知ることによって、将来人間として生きるのに必要な自我の基礎を持った、と言えよう。高度の性格障害者、自閉的情緒障害児などが、この時代に親の責任か、あるいは子どもの側の問題かで、生き生きとした母子の依存関係を経験していないことは、児童相談の場でよく知ることである。また、スピッツ Spitz の施設 *Hospitalismus* の研究では、性格障害のみではなく言語、知能の発達にも障害が認められることを実証している。またこの時代に一度愛した母親を失った幼児は悲惨である。ポウルビー Bowlby の「二歳の女の児の入院」の研究が、そのことをわれわれに如実に知らせたのであるが、私も同じような話を、三歳児健診の会場で、数回聞いているので、その一つをここに紹介する。

ヘルニヤの手術で一歳十か月頃、完全看護の病院に六日間入院させたが本当に可哀そうな目に会わせた。入院中散々泣いていたらしく、顔も変ったようにやせて退院して来た。せっかくおむつもとれかけていたのに全然教えなくなってしまう、ぼんやりした感じで母親の後も追わない。ところが二日目頃からは、母親にしがみついて片時も離れず、ちょっと姿が見えなくても泣きわめき、その頃は母子共に一緒に泣いていた。一か月もすぎた頃からまた普通に遊べるようになったけれど……。

子どもの心理について知識の少ない母親は、病院でひどい待遇

を受けたかのように述べているが、事實は誤解であり、その年齢が当然もたらす反応と考えてもよいとわたくしは考える。そのために、最近では、小児病棟を担当する医師や看護婦たちの間に、小児の入院に際して、乳幼児の心理的外傷を最小に食い止めるべき工夫が論じられるようになりつつある。

入院のような場合は再び母親との関係が回復できるが、死別、その他長期間の別れ、また、たとえ一緒に住んでいても、母親の心が幼児から離れるようなことがあったときなどに、深刻な人格形成の問題を起こした例が多い。

さて、十分に共生的母親関係を経験した幼児は二歳前後から、次第にもう母親の懐の中に甘んじなくなってくる。運動機能、言語などの発達に伴い、「これ何？」とつぎつぎに外界に関心を向け、また自分でやることを強調しはじめる。ときには強情なまでに自分でやりたがって母親と衝突する。まさに子ども自身が、自分で現実接触を始めるのである。すなわち、自我の分離・独立の開始と言えよう。このように人間の自我の芽生えは、出生してこの方育てられた共生自我、及び子ども自身の生物学的成長、双方の中から一体となって出現するものと思われる。したがって、話は少しそれるが、たとえば知恵遅れの子どもや、体に高度のハンディ

キャップを持つ子どもの自我の独立が正常児よりも遅れるのは当然と言えよう。それゆえに一そうこれらの子どもたちの養育、教育を担うものは、自我の健康な育成に留意しなければならぬ。

さて、自我の分離、独立の時代（マラーによれば二歳から三歳頃の間）に、決して幼児は自分一人でそれを遂行するのではない。「ママ見て！見て！」と自分の成果を母親に見てもらいたがり、「お利口さん」とほめられると喜んでもう一度挑戦してみようとする。同時に、何事も総て自分の欲求通りに物事がかなうような乳児時代の空想、そしてかなわなければ泣くか、母親の胸の中に逃げ込むような弱いフラストレーション・トレランス、それらももう通用しなくなったことを知り、我慢や、他人にゆずることができるようになる。もちろん、そうすれば「ママがほめてくれるから」、またはそうしなければ「ママに叱られるから」である。

この時代の幼児は、母親の愛情・承認と、自分の幼稚な欲求との二者選択に直面し、確立した母子関係を持っている子どもは迷わずに前者を選ぶことができる。そうして自我の分離・独立を始めた子どもは、はっきりと自分と他人の区別を認識し、対等な人間関係を同年配の子どもたちと営めるようになるわけである。

子どもが健康な自我発達をするためには、日々、母親の自我に

支えられ、またその健康の度合に非常に影響されていることが、これ迄におわかり頂けたことと思う。理想的に言えば、子どもの依存、甘えを敏感に感じて支持を与えると共に、子どもの成長へのエネルギーを適切にとらえ、その成長を許し、援助することができる母親であれば、その子どもは、安心してながら、日々自我の分離・独立のために生活することができる。大抵の母親は、自分がそんな役割を果たしているなどということを意識せずに、わが子の育児に日々明け暮れている。そして、たとえば「三歳児健診」の会場で子どもと共に不安を感じて、オロオロしたり、会場から逃げ出すような退行現象ではなくて、「幼稚園へ行くのよ」と子どもに言いきかせて、より成長への道を母子共に歩もうるのである。

三歳児健診で検診をこわがって泣く子を見ても、わたくしはその子の自我発達の問題などとは考えない。しかし、四歳を過ぎて幼稚園の生活の中で、母親から離れられなかったり、集団活動は参加できず、それが、何時までも続くような子どもの場合は、そろそろ、自我の独立という問題を心配する必要がある。つぎに既に十六歳にもなった男子の例を挙げる。

K男は現在十六歳、本来ならば高校二年になるところだが、今春、やっと中学三年を卒業した。小学校六年の途中から本格的な

登校拒否症を起こし、約四年間、家に閉じこもった末、やっと半年程、地区の情緒障害児対象の学級へ通って中学を卒業したわけである。K男の学校嫌いは、既に幼稚園時代からで、一人で逃げ帰ったり、嫌がったり、一年の三分の一も登園していなかったという。また園では現代流に言えば何時も、「白けて」居り、同年配の子どもの仲間に入らなかつた。知能的には問題はなく、むしろ大人びた生意気な事を言い、両親や、祖母は将来を楽しみにしていたようである。小学校低学年時代も同じような様子で、母親の心配はその点で続いていた。わたくしは彼が十四歳の頃、はじめに会ったが、一対一では生意気なことを言うのに、実際には同年配の男生徒、男の大人が恐ろしく、学校どころか外出も落着いてできず、また、母親に対しては激しい憎悪と怒りを、同時に二歳年下の妹に、不合理な迄の嫉妬を抱き、家庭では些細なことに怒り狂う有様であった。その後二年間、いろいろの人たちが彼を心理的に助け、その結果、彼はやっと情緒障害児学級へ通い、高校進学を現実的に考えられるまでに至った。この時点で彼を根気よく導いた障害児学級の中学教師が、全く驚いたようにのべていられることが興味深い。

「親たちが世話を焼きすぎることにはびつくりしましたね、彼が母親を拒否することをあまりやらなくなつて、高校受験すると言

い出してからは、母親は彼が毎日どのくらい勉強するか気になつて気になつて、トイレの中に、覚えられるようにして英語の単語を書いてはつたんですよ。高校の願書を出すことも親がやってみようし、一人ではさせられないんですね。それに彼も親にそうしてもらいたがっているんです。今迄あんなに大人ぶつて生意気な態度や言葉を使っていたのに、この頃は、パパ、ママって親のことを私の前でも言うんですよ。全くの甘えが顔を出して来たって感して、結局、幼稚園時代、親から離れられなかつた気持ちから全然成長していなかつたんですね。」

現在、小、中学校で心理的問題の第一位を占める登校拒否の心理的本質は、「分離不安」であるところリッジ Koedje はのべているが、この場合の分離とは、親からの距離的な分離ではなくて、自我の分離を意味するものであることがおわかり戴けよう。人間は幼い頃、母親関係が理由で心理的成長が順調にはかどらないような時代を過ごす、その後、身体や知能はたとえ成長しても、無意識的にその時代に心は固着して、その人の性格形成は、まるで固まっていない土台に家を建てているようなものである。幼児の教育に携わるとき、われわれは彼等の自我の健康な分離・独立をその母親と共に見守り、また援助したいものである。

(中沢小児クリニック)